

『万葉集』 卷四・六二四番歌について

—「道に逢う」恋と「笑む」こと—

岩田久美加

一 はじめに

『万葉集』に聖武天皇のうたは、一一首あり、集中の天皇のうたでは最多である。それらは、題詞や配列から推測すると、神亀年間（七二四～七二九年）から天平勝宝四年（七五二年）までの二十五年以上にわたっている（但し、作歌事情の詳細が不明である季節のうた二首（⑧一五三九・一五四〇）は除く）。また、内容も、相聞的なうた、宴席における儀礼的なうた、行幸時の望郷的なうた、季節のうたと多岐にわたっている。このような聖武天皇のうたであるが、個別の作品研究は手付かずの部分が多い。例えば、次のうたもそうである。

天皇思酒人女王御製歌一首〔女王者穗積皇子之孫女也〕

A みちにあひて 道相而 あまししからに 咲之柄尔 ふるゆきの 零雪乃 けなほけぬがに 消者消香二 こふといふわざも 戀云吾妹 (④六二四)

A 歌には、訓に揺れがある。第二句については、元暦校本をはじめほとんどの諸本ⁱが「エミセシカラニ」とよんでいたものを、『代匠記・精』が「エマスガカラニ」、『童蒙抄』が「エメリシカラニ」、『考』が「エマシシカラニ」とよみ、現在多くの注釈書ⁱⁱが「エマシシカラニ」とよんでいる。また、結句についても、本文に異同はなく、元暦校本、類聚古集、広瀬本などはじめ諸本ⁱⁱⁱが「コフテフワキモ」とよんでいるが、『代匠記・精』は「云」は「去」の誤として「コヒユクワキモ」とよみ、『玉の小琴』は「云」は「念」の誤として「コヒオモフワギモ」とよみ、それを『新考』『口訳』は引きつぎ、『古義』も「コヒモフワギモ」とよんだ。それに対して、『略解』の「コフトフワギモ」の訓を『全釈』は引きつぎ、その後『総釈』『窪田評釈』『私注』『旧大系』『注釈』

と続いた。その後『全註釈』『旧全集』『集成』『新編全集』『釈注』『新大系』『全歌講義』『全解』は縮約形ではなく「コフトイフワギモ」とよみ現在では多くの注釈書が従っている。

このような訓のゆれは、第二句については、「笑」むのが酒人女王もしくは天皇であるという理解から、「笑む」の敬語「笑ます」とよまれるようになったと考えられる。また、結句については、意味が分かりづらいと考え、「私は恋しいと思うかわいい人よ」とよむことで、題詞の「思酒人女王」にびたりと一致すると考えたのだろう。しかし、本文に異同がないのであるから、『全釈』は「とふ」という伝聞を表現する言葉の縮約形を用いて「世の人が恋ふと言ふ我妹よ」の意に解釈し、『私注』は厳密な意味での伝聞とは考えずに、「というわけだ。といふものだ。」くらいの表現をやわらげるはたらきだとした。また、『旧全集』は、結句の「恋ふ」までを酒人女王の言った言葉を直接話法で引用するうたと捉えた。そして、この理解は現在多くの注釈書^{iv}で支持されている。

ところで、このように諸説分かれているが、そもそも「道に逢ひて」とはどのような状況なのだろうか。まず、誰が道を歩いていて、誰に逢うのか、次にこれまで検討の対象にすら上がらなかった「道」で「笑」むとは何を意味するのかを明らかにする。これらの検討を通して、どのような場で何を表現したうたのなかのなかなのはっきりさせて、あわせて聖武天皇の作品の中においてA歌はどのような意味があるかを考える。

二 「道に逢」うということ

本章では、「道に逢」うことについて検討する。そもそも、「道に逢」うことについて、諸注ほとんど触れていない。わずかに『新編全集』が「内裏の後庭などで聖武天皇が作者を見かけ」たとあるくらいである。しかし、「内裏の後庭」で相手を「見かける」ことを「道に逢」うと表現するのだろうか。ここでは、うたのなかの「道に逢」うという表現を検討し、誰が誰と逢うのかを明らかにする。

B 焼津辺に我が行きしかば駿河なる阿倍の市道に逢ひし兎らはも
(③二八四 春日藏首老)

C うちひさす宮道に逢ひし人妻故に玉の緒の思ひ乱れて寝る夜しそ多き
(⑪二三六五 古歌集出)

D 琴酒を 押垂小野ゆ 出づる水 ぬるくは出でず 寒水の 心もけやに
思ほゆる 音の少なき 道に逢はぬかも 少なきよ 道に逢はさば 色
着せる 菅笠小笠 我がうなげる 玉の七つ緒 取り替へも 申さむも
のを 少なきよ 道に逢はぬかも (⑩三八七五 作者未詳)

E 『古事記』中巻・応神天皇条

故、木幡の村に到り坐しし時、麗美しき嬢子、その道衢に遇ひき。(中略)
この蟹や 何処の蟹 百伝ふ 角鹿の蟹 横去らふ 何処に到る 伊知遅島
美島に著き 鳩鳥の 潜き息づき しなだゆふ 佐佐那美路を すくすくと
我が行ませばや 木幡の道に 遇はしし嬢子 後姿は 小盾ろかも 齒並み
は 椎菱如す 櫟井の 丸邇坂の土を 初土は 膚赤らけみ 底土は 丹黒き
故 三つ栗の その中つ土を かぶつく 真火には當てず 眉書き 濃に書き
垂れ 遇はしし女人 かもがと 我が見し子ら かくもがと 我が見し子に
うたたけだに 對ひ居るかも い副ひ居るかも (記四三)

B歌は、「駿河なる阿倍の市道」で逢った子を思い出してよんでいるうたである。「阿倍」は駿河の国府のあったところであり、その「市道」とは、「市の道」である。

F 海石榴市の八十の衢に立ち平し結びし紐を解かまく惜しも
(⑫二九五 作者未詳)

F歌から、「市」には道が分岐するところである「衢」があり、それが「八十の衢」であるから、道が縦横に走っていたことが分かる。そして、「衢」が広場のようになっていたのであろう、物資交易をする場である「市」が立っていたことが分かる。そして、F歌の「海石榴市」は『日本書紀』武烈即位前紀には、皇太子の結婚の申し込みに対して影姫が、「妾望はくは、海石榴市の巷に待ち奉らむ」と答え、それを受けて皇太子は「果たして期りし所に之きて、歌

場〈歌場、此をば宇多我岐と云ふ〉の衆に立たして、影姫が袖を執へ」たとの記述がある。つまり、海石榴市は歌垣が行われていた場であった。すると、F歌の「立ち平し結びし紐を解かまく惜しも」という表現は、海石榴市の歌垣の場において出会った相手が結んでくれた紐を解くのが惜しいというものである。つまり、市やその衢を含め周辺の道は男女の出会いの場になるような広さがあったことが分かる。ここから考えると、B歌は、たまたま焼津に行った時に阿倍の市への道で出会った女の子を春日老が回想しているうたである。

C歌は、古歌集出の旋頭歌である。「宮道に逢ひし人妻」とあるように、都大路で出会った「人妻」を思うが、「人妻」ゆえに手出しすることが出来ずに思い悩むといううたであり、表現主体は男である。

Eは、『古事記』応神天皇条の記事である。天皇が木幡の村に到った時に、麗美しき嬢子が衢で天皇に出会い^v、次の日にその麗美しき嬢子の家を訪れ、食事の時にその麗美しき嬢子に大御酒盞をとらしめながら天皇がうたをうたったという状況である。その天皇がうたったうたの中で、「木幡の道に 遇はしし嬢子」との表現がある。これは、木幡の村への道で出会った「麗美しき嬢子」を意味している。そして「後姿は 小盾ろかも 齒並みは 椎菱如す 櫛井の 丸邇坂の土を 初土は 膚赤らけみ 底土は 丹黒き故 三つ栗の その中つ土を かぶつく 真火には 當てず 眉書き 濃に書き垂れ」とその女の容姿を丁寧に叙述し、「遇はしし女人」と言い換え、さらに「かもがと 我が見し子ら」「かくもがと 我が見し子」とさらに女について叙述しながら言い換え、「對ひ居るかも い副ひ居るかも」として、「向き合っていることだ、寄り添っていることだ」と現状を表現している。うたの前文では女の名を尋ねてからその女の家を尋ねているのであるから、妻問いであり、表現主体である応神天皇が「道に」逢った女について「寄り添っている」というのであるから、妻問いの成就を表現しているといえよう。また、このうたでは、「遇はしし嬢子」「遇はしし女人」と、女に対して敬語を用いている。これはA歌において「笑ましし」と敬語を用いているのと同じである。

D歌は、「琴酒を 押垂小野ゆ……音の少なき 道に逢はぬかも」と「少な

きよ 道に逢はさば……少なきよ 道に逢はぬかも」という二段構成になっている。D 歌では「道に逢はぬかも」と二度繰り返して表現されているが、誰が誰に「道に逢」うのかは表現されていない。ただ後半「道に逢はさば」とあり、「道で逢っ」たならば、「我がうなげる 玉の七つ緒」と「色着せる 菅笠小笠」とを「取り替へも 申さむものを」と表現しているのだから、この後半の表現主体は、玉をうなじにかけており、その相手は「菅笠小笠」を持っている。ここで、集中の「笠」についての用例をあげる。

G 梯立の倉橋川の川のしづ菅我が刈りて笠にも編まぬ川のしづ菅

(⑦一二八四 柿本人麻呂家集)

H 我が背子が使ひを待つと笠も着ず出でつつそ見し雨の降らくに

(⑩二六八一 作者未詳)

I 笠なみと人には言ひて雨障み留まりし君が姿し思ほゆ

(⑩二六八四 作者未詳)

J 我妹子が袖を頼みて真野の浦の小菅の笠を着ずて来にけり

(⑩二七七― 作者未詳)

K かきつはた佐紀沼の菅を笠に縫ひ着む日を待つに年そ経にける

(⑩二八一八 作者未詳)

L おし照る難波菅笠置き古し後は誰が着む笠ならなくに

(⑩二八一九 作者未詳)

H 歌 I 歌 J 歌の用例から、笠を身につけるのは H 歌の「我が背子」や I 歌の「雨障み留まりし君」J 歌の「我妹子が袖を頼み」としている男である。つまり、男女の関係にある男のものであるのが「笠」である。また、G 歌では「我が刈りて笠にも編まぬ」として、男が笠を編んでいる。そこから考えると、笠を編むのは男の作業であり、それを着て女のもとに行くということが想定されよう。ところで、K 歌と L 歌は「右二首」と K 歌の左注で記されており、二首一組のうたであり、G 歌を参考にして K 歌を考えると、表現主体は男であり、二首の関係について『釈注』の「男←→女の関係の間答歌」との指摘を踏まえれば、K 歌での男が「笠」に寄せて女と契りを結ぶことが出来ない年月の長さ

を嘆くことに対して、L歌はK歌の「笠」を用いて男に対して長らく捨て置いたことを恨む女の切り返しのうたとなっているといえよう。つまりK歌はL歌の男の歌に対して、そのうたの表現「笠」を用いて切り返しているのである。このような関係をK歌とL歌に見るのであれば、今問題としているD歌についても、後半は、女の相手は「菅笠小笠」を持っている男であり、それを自分の「玉の七つ緒」と交換したいから、「道に逢はぬかも」と述べているのである。そして、この「道に逢はぬかも」という表現は、D歌の前半にもあり、D歌の後半はその前半の表現を用いていることは明らかである。この同じ表現については、双方同じことを表現しており、同一のものとしている注釈書^{vi}もある。しかし、D歌の冒頭「琴酒を 押垂小野ゆ 出づる水 ぬるくは出でず 寒水の」という序についての佐佐木信綱『評釈万葉集』の「序は野中の清水の爽かに湧きあがる情景を叙してゐるが、これは機械的の序ではなく、実地に取材した所謂有心の序であらう」との指摘を踏まえ、『釈注』が、「実地」は「小さな滝がある野原であり、その滝のあたりには湧き水もあるすがすがしい地と知られ」ており、「小野」は「村人の生活圏内にあつて時として村人や近郷の人びとの遊行を誘う名所」であるとし、次の『常陸国風土記』（久慈郡）の記事との類似性を指摘し、D歌も同じような場でよまれたものであるから、序においてその歌がよって立つ情景をうたい上げたのだという。

謂はゆる高市、ここより東北のかた二里に密筑の里あり。村の中に浄泉あり。俗、大井と謂ふ。夏は冷かにして冬は温かなり。湧き流れて川と成れり。夏の暑き時、遠邇の郷里より酒と肴とを齎賚て。男女会集ひて、休ひ遊び飲み楽しみり。

その指摘を踏まえれば、D歌は水辺における人々が集って歌舞遊宴を楽しむことが出来るような場の周辺に広がる「道」で「逢」えるだろうかと思われたものであり、男女のうたでの掛け合いが行われ、それが一首にまとめられたとの想定は可能であると考え。長歌一首で問答体をなすものは、次のようなものがあり、不自然ではない。

物思はず 道行く行くも 青山を 振り放け見れば つつじ花 にほえ娘子

桜花 栄え娘子 汝をぞも 我に寄すといふ 我をぞも 汝に寄すといふ
汝はいかに思ふ 思へこそ 年の八年を 切り髪の 同年児を過ぎ 橋の
末枝をすぐり この川の 下にも長く 汝が心待て

(⑬三三〇九 柿本人麻呂)

従って、D 歌も前半は男のうたであり、後半は女のうたであると言えよう。すると、前半で「道に逢はぬかも」というのは、男が女に対しての思いであり、それを後半では女が K 歌のように先の男のうたの表現を用いてうたっているといえよう。

以上から、B 歌 C 歌 E の記事から、うたの中で「道に逢」うのは全て男が女に逢うことを表現しており、D 歌についても、初めに男が女に「道に逢」うことをよみ、それを問答であるがゆえにそのうたの中心的表現である「道に逢はぬかも」という表現を用いたためにたまたま女が男に「道に逢」うということがよまれた例外的のものであるといえよう。

ここで、「道」や「道」での出会いの特徴について明らかにする。

M うちひさす宮道を人は満ち行けど我が思ふ君はただ一人のみ

(⑩二三八二 作者未詳)

N 玉梓の道行かずしあらばねもころのかかる恋にはあはざらましを

(⑪二三九三 作者未詳)

O 人言の讒しを聞きて玉梓の道にも逢はじと言へりし我妹

(⑫二八七一 作者未詳)

M 歌では「宮道」には人が多くいること、N 歌では「道」を行かなかつたら「かかる恋」など出会わなかつたろうにとの表現から、「道」は人が多く行き交い、そこで男女が出会うこともあり、恋に落ちることもあったことが分かる。更に O 歌から人目も多いがゆえに、悪口など噂もされやすく、少し気まずい関係になった男女においては、「玉梓の道にも逢はじ」という「道でさえも」逢わないと相手に言われてしまうような場が、「道」であるということが分かる。従って、「道に逢」うという表現は基本的に、男が女に対して恋情を持つ時に用いるものであり、「道」は男女の出会う機会がある場であるが、それは「歌垣」

などの目的をもって人が集まる場ではなく、もともと人が多く行き交う場でたまたま出会い、恋情を有したという表現であろう。従って、B歌C歌D歌Eの記事の中のうたのような、「道に逢う」恋の一つとしてA歌は位置づけられよう。

三 「笑」むこと

本章では、第二句「笑まししからに」について検討する。この第二句については、「笑」むのが、i 聖武天皇とする『旧大系』『旧全集』『集成』『全注』『新編全集』『新大系』『釈注』『全歌講義』『全解』などと、ii 酒人女王とする『全釈』『総釈』『窪田評釈』『私注』『全註釈』『注釈』『和歌大系』などで説が分かれている。

ところで、『万葉集』の中に、「笑む」「笑ます」「笑まふ」「笑まひ」などの語を含むうたは、約三十首ある。平安朝以降のうたにおいては、「笑む」ことはよまれなくなり、上代における特徴的な表現であるといえよう。そして多くが次に掲げるように、相聞歌において女の「笑」み^{vii}を男がよんだものである。

思はぬに妹が笑まひを夢に見て心の内に燃えつつそ居る

(④七一八 大伴家持)

我がやどの時じき藤のめづらしく今も見てしか妹が笑まひを

(⑧一六二七 大伴家持)

待つらむに至らば妹が嬉しみと笑まむ姿を行きてはや見む

(⑪二五二六 作者未詳)

思はぬに至らば妹が嬉しみと笑まむ眉引き思ほゆるかも

(⑪二五四六 作者未詳)

はね纒今する妹がうら若み笑みみ怒りみ付けし紐解く

(⑪二六二七 作者未詳)

燈火のかげにかがよふうつせみの妹が笑まひし面影に見ゆ

(⑪二六四二 作者未詳)

我妹子が笑まひ眉引き面影にかかりてもとな思ほゆるかも

(⑫二九〇〇 作者未詳)

遠くあれば姿は見えず常のごと妹が笑まひは面影にして

(⑫三一三七 作者未詳)

なでしこが花見のごとに娘子らが笑まひのにほひ思ほゆるかも

(⑬四一四四 大伴家持)

その一方で、男の「笑み」を女がよんだ相聞歌もある。

青山を横ぎる雲のいちしろく我と笑まして人に知らゆな

(④六八八 大伴坂上郎女)

坂上郎女のうたは諸注^{viii}指摘するように次の歌の類歌である。

葦垣の中の和草にこよかに我と笑まして人に知らゆな

(⑪二七六二 作者未詳)

このうたと先の大伴坂上郎女のうたの関係について、主想であるで下句が同一であり、集中の「にこ草」の用例はほとんどが相手の女性を表わす比喻であり、「葦垣」も相思相愛の男女が出会う場や忍ぶ恋の場として、葦垣の中の女への愛情が男性側から歌われ、「笑」むのは女性であるとし、大伴坂上郎女のうたの「笑」むは「集中でもごくまれな男の笑みに転用」しているのであり、男の「笑」みは例外的であるとする青木生子^{ix}の指摘は首肯すべきものである。

従って、第二章で検討したように、A歌は男が道で女に「逢」うのであるから、ここでの「笑」むのは女であり、ii説の酒人女王である。

四 第一句・第二句について

前章までの考察をもとに、ここでは第一句第二句について考察する。

第二章において、「道に逢」うという表現は、不特定の男女がたまたま行き合って出会う場で、女と出会うことで男が女に対して恋情を抱いた時に用いるものであることが明らかになった。それを踏まえると、「笑」むのは、女であるから、A歌においてはそれが酒人女王ということになる。従って、その訓も現在多く

の注釈書がよんでいるように「エマシシカラニ」でよい。

では、具体的にどのような女と「道に逢」うのだろうか。ここで、道にいる女について検討する。

E' この蟹や 何処の蟹 百伝ふ 角鹿の蟹 横去らふ 何処に到る 伊知遅島 美島
に著き 鳩鳥の 潜き息づき しなだゆふ 佐佐那美路を すくすくと 我が行
ませばや 木幡の道に 遇はしし嬢子 後姿は 小盾ろかも 齒並みは 椎菱如
す 櫟井の 丸邇坂の土を 初土は 膚赤らけみ 底土は 丹黒き故 三つ栗の
その中つ土を かぶつく 真火には當てず 眉書き 濃に書き垂れ 遇はしし
女人 かもがと 我が見し子ら かくもがと 我が見し子に うたただけに 對
ひ居るかも い副ひ居るかも (記四三)

P 道の辺の草深百合の花笑みに笑みしがからに妻と言ふべしや

(⑦一二五七 作者未詳)

E' 歌は、先にあげた E 記事に含まれるうたである。二章でも検討したが、木幡の道で逢った女の容姿を「後姿は 小盾ろかも 齒並みは 椎菱如す 櫟井の丸邇坂の土を 初土は 膚赤らけみ 底土は 丹黒き故 三つ栗の その中つ土を かぶつく 真火には當てず 眉書き 濃に書き垂れ」と長々と叙述し、それが「かもがと 我が見し子」「かくもがと 我が見し子」と「こんなふうであったらと私が見た女の子」「こんなようにありたいと私が見た女の子」と表現し、理想的な容姿として描いている。そして E 記事の中では妻問いをする相手の女であるから、男にとって妻としての理想的な容姿であったといえよう。

P 歌は、『全註釈』などが A 歌の参考歌としてあげているが、上二句が「花笑み」の序で、上三句が「笑みし」の序として構成されている。つまり、「道端の草深百合の花の蕾がほころびるように「笑」んだからといって「妻」と言ってもよいのでしょうか」という意になる。すると、「道端の草深百合の花」のような（道端にいる）女が「笑」む様に対して、男が「妻」だと決めつけかかったような言い様をしたことについて、そんなことで「妻」と言って良いのかという女の困惑した様子をよんだものだと考えられよう。

ところで、女が「笑」むことで男が「妻」にしたいと思うほど、女の「笑」

みは男にとって恋情を引き起こすものであろうか。第二章で挙げたうたを次に再掲する。

Q 我妹子が笑まひ眉引き面影にかかりてもとな思ほゆるかも

(⑫二九〇〇 作者未詳)

R 思はぬに妹が笑まひを夢に見て心の内に燃えつつそ居る

(④七七八 大伴家持)

Q 歌は「我妹子」の「笑」みや眉の様子が面影にちらつくことによって「もとな思ほゆる」というのであるから、愛する女の笑顔は思いを強くするというものである。また、R 歌は「妹が笑」みを夢に見たことで恋心が燃え立つというのである。さらに次のようなうたもある。

S 己がををおほにな思ひそ庭に立ち笑ますがからに駒に逢ふものを

(⑭三五三五)

S 歌は庭に立って「笑」むやいなや「駒に乗る（男に）逢える」というというような諺を背景にしたうたであると諸注^{*}指摘している。以上 Q 歌 R 歌 S 歌を参考と考えてみると、女の「笑」みは、男の恋情を燃え上がらせる作用があると見えよう。

ところで、次のうたには「笑」みて立っている女に道行く男は自分の本来行くべき道も進まず、女のとりこになってしまうという描写がある。

T しなが鳥 安房に継ぎたる 梓弓 末の珠名は 胸別の 広き我妹 腰細の すぎる娘子の その姿の きらぎらしきに 花のごと 笑みて立てれば 玉梓の 道行き人は 己が行く 道は行かずて 呼ばなくに 門に至りぬ さし並ぶ 隣の君は あらかじめ 己妻離れて 乞はなくに 鍵さへ奉る 人皆の かく迷へれば うちしなひ 寄りてそ妹は たはれてありける

(⑨一七三八 高橋虫麻呂歌集出)

T 歌は、珠名娘子を詠んだうたである。その中で「胸別の 広き我妹 腰細の すぎる娘子の その姿の きらぎらしきに 花のごと 笑みて立」つ様子が描写されている。このような男を魅了する容姿を有している女が「笑」むことに

ついで、『和歌大系』^{xi}は『文選』卷十九「登徒子好色賦」の「東家之子」の「嫣然として一笑すれば、陽城は惑はし下蔡を迷はす」とあるような美人であると讃えたのだと述べるが、それを踏まえて影山尚之^{xii}は、「珠名娘子を典型として勝鹿真間娘子も振舞い同じ」くして、「男を誘惑する微笑」をするのであるとした上で、そのような女は「不品行な娼婦性と常に隣り合わせ」であるが、酒人女王もこのような女と同じく評判の美女であり、男を惑わす評判が立っていたとする。

U ……勝鹿の 真間の手児名が 麻衣に 青き衿付け ひたさ麻を 裳には織り着て 髪だにも 搔きは梳らず 杳をだに はかず行けども 錦綾の 中に包める 斎ひ児も 妹に及かめや 望月の 足れる面わに 花のごと 笑みて立てれば 夏虫の 火に入るがごと 湊入りに 舟漕ぐごとく 行きかぐれ 人の言ふ時 いくばくも 生けらじものを なにすとか 身をたな知りて 波の音の 騒く湊の 奥つ城に 妹が臥やせる…… (⑨一八〇七 高橋虫麻呂歌集出)

上にあげたU歌は、先に指摘された勝鹿真間娘子をよんだものである。確かにT歌と同じ「花のごと 笑みて立てれば」との表現がある。しかし、勝鹿真間娘子は多くの男性に良い寄られると、「身をたな知りて」死んでしまう。それに対してT歌の珠名娘子は「うちしなひ 寄りてそ妹」としなだれかかる女であり、そのような珠名娘子には「たはれてありける」との批判がなされる。確かに、S歌の珠名娘子は言い寄られて媚態を示すが、U歌の勝鹿真間娘子はそのようなこともなく死んでしまうのであるから、不品行な娼婦性があるといえるのだろうか。

V 葦垣の中の和草にこよかに我と笑まして人に知らゆな

(⑩二七六二 作者未詳)

先に三章であげたうたを再掲するが、V歌の下の句は「私にだけ私のかわいい女の子は笑みを浮かべて他の人には知られるな」という意である。また、先に三章で「笑」むの用例としてあげたうたは全て「妹」やなど恋人の「笑」みであった。さらに、Q歌R歌S歌において思い出される「笑」みも全て恋人な

どのものであった。ここから考えると、女の「笑」みは先に確認したように、男に恋情をたぎらせるものであって、V 歌が示すように、恋人以外には向けるべきものではなかったと考えられる。なぜなら、女の「笑」みを見てしまったら、男は恋に落ちるのであり、P 歌のようにたまたま「道」で「笑」むだけで「妻だ」と言うてしまうからである。ただ、女はそのようなことを自覚していないため、P 歌では困惑し、相手の男に切り返すのである。同じように、U 歌の勝鹿真間娘子も無自覚に不特定多数の人が行きかう道で「笑」んでしまったがゆえに、恋情を訴える男が殺到し「身をたな知りて」死んでしまう状況が引き起こされた。そういう意味では、いわゆる「天然小悪魔」な女として造形されていたと言えよう。但し、T 歌U 歌ともに「笑みて立つ」という表現であるから、「道に立つ」のであり、なんらかのために道を歩むということではない。第二章でF 歌の論考時にあげた『日本書紀』の海石榴市の記述で、「歌場の衆に立たして」という表現があったが、それを踏まえると、T 歌U 歌の珠名娘子も勝鹿真間娘子も「歌垣」のような場に立ったと推測できる。だからこそ、「笑みて立てれば」という表現をしており、複数の人が我先にと声をかけてくる状況になったのだろう。従って、第二章で検討した「道に逢う」恋の「道に逢う」という表現と、T 歌U 歌の道の「立つ」では表現が異なり、またうたの場も異なるので、S 歌U 歌を本論の論考の参考には出来ないと考える。

これを踏まえると A 歌の第一句第二句は「道で男がたまたま出会った酒人女王が「笑」みなされたので」の意になる。

五 第三句・第四句について

ここで「降る雪の消なば消ぬがに」について考えてみたい。

W 秋萩の枝もとををに置く露の消なば消ぬとも色に出でめやも

(⑧一五九五 作者未詳)

X 朝霜の消なば消ぬべく思ひつついかにこの夜を明かしてむかも

(⑩二四五八 作者未詳)

Y 春されば 花咲きををり 秋付けば 丹の穂にもみつ うまさけを 神
奈備山の 帯にせる 明日香の川の 早き瀬に 生ふる玉藻の うちな
びく 心は寄りて 朝露の 消なば消ぬべく 恋ひしくも 著くも逢へ
る 隠り妻かも (⑬三二六六 作者未詳)

「消なば消ぬがに」の類例である。ともに「露」「朝霜」「朝露」など消えやすくはかないものから「消」を起こしている。従って、ここでも「降る雪」という消えやすいものから「消」をおこす枕詞である。そしてW歌は「我が身が消えてしまいそうになっても」、X歌Y歌「我が身が消えてしまいそうなほど」といった、強い思いを表出する表現である。それを踏まえて考えるならば、A歌の第三句、四句は「降る雪が消えやすいように、我が身がきえてしまいそうなほど」となる。

六 結句について

これまで、A歌は、たまたま「道に逢」う男に対して酒人女王が「笑」まれたがゆえに、降る雪が消え入りやすいように、消えてしまいそうなほど「恋ふ」という構造になっていることを明らかにしてきた。ところで、この「恋ふ」の主語については、第一章でふれたように近年多くの注釈書が、「笑ます」の主語を天皇とし、「恋ふ」の主語を女王としているが、これまでの考察より、「笑む」のは酒人女王であるからそれは成立しない。「恋ふ」の主語はそれ以外では、「笑ます」の主語を女王とし、「恋ふ」の主語を世の中の人々とする『全釈』・『総釈』・『私注』・『注釈』・『和歌大系』の説と、「笑ます」「恋ふ」とともに主語を女王とする『全註釈』の説がある。しかし、『全註釈』の「道で出逢つて、にこやかにお笑いなされた、それだけなのに、降る雪のように今にも消えてしまいそうに、戀しく思うというのですね、あなたは。」という訳は、『全歌講義』が指摘するように「笑ますがからに」が「恋ふ」の原因になるはずであるが、そうはなっておらずこの説に従うのは難しい。そうすると、「といふ」を伝聞表現とすると、「恋ふ」の主語は世の中の人々ということになる。ところで、集

中には多くの「といふ」「ちふ」「てふ」があるが、そのいくつかを次にあげる。

Z 我はもや安見見得たり皆人の得かてにすといふ安見見得たり

(②九五 藤原鎌足)

a 古ゆ人の言ひける老人のをつといふ水そ名に負ふ瀧の瀬

(⑥一〇三四大伴東人)

b 楽浪の連庫山に雲居れば雨そ降るちふ帰り来我が背

(⑦一一七〇 作者未詳)

Z歌は「皆人」が「得かてにす」と「いふ」のであり、a歌は「古ゆ人の言」っていた「老人のをつ」と「いふ」水である。従って、どちらも「皆」や「古くから人」が言ってきたという意になり、誰が言ったのか明示されている。それらに対して、b歌は主語が明示されていないが、「楽浪の連庫山に雲居れば雨そ降る」と言うのであるから、その土地の人々が経験から導き出したものを言っているのであり、享受者である土地の人々にとっては自明のことである。このように見ると、Z歌a歌のように「といふ」の直前の表現の主語が明示されているものもあれば、明示されていないものもある。『全歌講義』は、「恋ふ」の主語が歌に表現されていないのが問題で、たとえば、「降る雪の」の代わりに、「皆人の」とすることもできたはず」としてこの説は取らない。しかし、主語が明示されてなくてもb歌のように成り立っているうたがあり、それがためにこの説をとらないということはできない。A歌で、「恋ふ」の主語を明示しないのは、b歌のように享受者にとっては自明のものであったからであると考えられる。「道に逢」うのは、これまで見てきたように「男」であり、「酒人女王」に「たまたま出会」い、その酒人女王が「笑」まれたがゆえに「降る雪が消えやすいように、我が身もきえてしまいそうなほど」に「恋ふ」という状況になっているというのであるから、「恋ふ」のはこの「男」である。

ここで少し論がそれるが、第三章では検討対象外であった男の「笑み」について考察したい。男の「笑み」には、次のような宴における、主人へのあいさつ歌に親愛の情を示す「笑み」^{xiii}をよんだものがある。

……我が待つ君が 事終はり 帰り罷りて 夏の野の さ百合の花の 花笑

みに にふぶに笑みて 逢はしたる 今日を始めて 鏡なす かくし常見む
面変はりせず (18四一一六 大伴家持)

正月立つ春の初めにかくしつつ相し笑みてば時じけめやも

(18四一三七 大伴家持)

また、それに近いもので、次にあげる宴席の歌で河村王が琴を持ってうたううたがあるが、場に即して何らかの寓意を持ってうたわれたものであろう。宴における場を和ますためのあいさつ歌の一種と考えられる。

かるうすは田廬の本に我が背子はにふぶに笑みて立ちませり見ゆ

(16三八一七 河村王)

これら男の「笑」みは恋情を表わすのではなく、宴などのあいさつ歌に用いられており、場を和ませ、円滑に物事をすすめることができるようにする働きがあり、ある意味公的な場における社交上の必要から「笑」まれたものと言えよう。

このような男の「笑」みを参考にするならば、酒人女王は「女王」としての公的な立場で相手に接し、「笑」みを浮かべたのであって、女としての「笑」みを浮かべたのではない。それは『窪田評釈』の「敬意を表されたがために、答礼としてのこと」との指摘と重なる。

それを相手の男は自分へ女としての「笑み」と勘違いしてとらえて、恋に落ちたという状況なのである。そのように考えるならば、「恋ふ」の主語が明示されないのも、噂として広がっていて、当時の宮廷社会においては、誰のことか明らかであったために明示されなくても享受者には分かることだったからだと考えられよう。このように噂として広がるのは、A歌の「道に逢ひて」の「道」が、宮城の中の「道」であり、宮廷の人々の目にふれる場での出来事であったためであろう。

このように考えれば、初句から「恋ふ」まで全て主語が「男」であり、歌意が分かりやすい。因みに『窪田評釈』も、「往還で逢って、笑みをなされたがゆえに、その人は、死ぬならば死んでしまえというごとくにも恋うているという噂のある吾妹よ」と訳し、「道に逢ひて」の語訳で「女王が往還で、人に逢っ

ての意。その人は、男性で、身分の知れている人とはみえるが、誰ともわからない。」としている。

以上から、このうたは、「道で（自分が）たまたま出会った酒人女王が「笑」みなされたので、「降る雪が消えやすいように、我が身もきえてしまいそうなほど恋うている」とその男が言っている我妹」という意になる。

七 まとめ

最後に、前章で訳したような A 歌は、なんのために作られたうただったのかを考察する。ここで題詞について考えてみたい。「天皇思酒人女王御製歌一首」とある。題詞に「思」が用いられているものは、例えば次のようなものがある。

在久迹京思留寧樂宅坂上大嬢大伴宿祢家持作歌一首 (④七六五)

帥大伴卿遥思芳野離宮作歌一首 (⑥九六〇)

依興各思高円離宮處作歌五首 (⑳四五〇六)

対象が人であれ、場所であれ、表現主体から離れたところにあるものを思いやっ
てよんだうたである。これは影山尚之^{xiv}の題詞に「思」が用いられているう
たに関する「歌の相手が眼前にない場合に偏している」との指摘を踏まえるな
らば、A 歌は聖武天皇の眼前に酒人女王は存在しない^{xv}。

これらの例を参考に A 歌について考えるならば、聖武天皇の眼前にいない
酒人女王について、「道でたまたま出会った男が、女王が「笑」みなされたので、
「降る雪が消えやすいように、命もきえてしまいそうなほど恋うている」と男
が言っている「我妹」だなあ、といううたをよんだのと考えられる。つまり、
「女王に道でたまたま出くわして「笑」まれて恋に落ちたと言っている人がい
て噂になっているなあ」と噂になっていることをよんだうたなのである。酒人
女王が聖武天皇と男女の関係にあったかは分からないが、同じ皇族としての近
しい関係から「我妹」という表現を用いたことはありえよう。そして「噂になっ
ている私の愛する女の子だなあ」とよんだのである。ここで P 歌を再掲する。

P 道の辺の草深百合の花笑みに笑みしがからに妻と言ふべしや

(⑦一二五七 作者未詳)

P歌を参考にすると、A歌は、P歌の「笑」んだ女に対して、「妻と言」った男を切り返したP歌の表現主体と同じような状況にある酒人女王に対して、自分と仲の良い女の子が噂の中心になっているのなだなあという感慨をよんでいるのである。そして、噂の中心人物である酒人女王をわざわざ「我妹」という表現を用いていると考えるならば、その状況を面白がって恋歌めかしてよんだうたと考えることが出来るのではなかろうか。

以上から、聖武天皇には、宴のうたや儀礼歌など様々な場でよまれたうたがあるが、A歌はその中でも数少ない公的ではない場でよまれたうたということがいえよう。もちろん、他にも相聞歌としては、海上女王との贈答歌があるが、卷四・五三〇歌の左注に「右、今案ふるに、この歌は擬古の作なり。ただし、時の当たれるを以て、即ちこの歌を賜ふか。」とあり、「古歌を模したうた」を「時宜にふさわしいもの」として送ったというものであり、古歌尊重の姿勢がうかがわれ、海上女王の返歌の「君の御幸を聞かくし良しも」(④五三一)の表現から行幸における宴の場でのうたであり、ある意味で公的な場におけるうたである。それに対して、A歌は、作者未詳歌に多い「道に逢う」恋に関わるうたであり、「宮内内の噂」という非常にタイムリーで私的な関心からよまれたうたである。A歌は、天皇の身近な女官や内舍人などが噂しているのを耳にし、思わず口ずさんだ「私的な」うたであろう。これは、聖武天皇とその身近な人々との日常の関係性を示すものであるといえよう。

ⁱ 元暦校本・金沢本・類聚古集・紀州本・温故堂本・京都大学本・西本願寺本・大矢本・広瀬本、及び活字附訓本は「エミセシカラニ」、神宮文庫本は「アミセシカラニ」とよんでいる。

ⁱⁱ 『総釈』・『窪田評釈』・『私注』・『旧大系』・『注釈』・『全註釈』・『旧全集』・『集成』・『新編全集』・『釈注』・『新大系』・『全歌講義』・『全解』など

ⁱⁱⁱ なお、「こふるわきもこ」とよむ元暦校本では、「ふる」の右に緒で「テフ」とあり、下の「こ」の右に緒で「カ」がある。

^{iv} 『旧大系』・『旧全集』・『集成』・『全注』・『新編全集』・『釈注』・『全歌講義』・『全解』であり、『旧全集』・『集成』・『全注』・『新編全集』・『釈注』・『全解』は、A歌の初句から第四句までを酒

人女王のことばとする。また、「第四句までの主語は酒人女王」であり、第二句「笑まし」は天皇に対する敬語とする『新大系』も同様に考えていると思われる。なお、『旧大系』・『全歌講義』は第三句・第四句を酒人女王のことばとする。『集成』・『釈注』は、「女王は「笑ます」の主語を誰と言うことなく詠んだのを天皇が自分のことととりなして歌ったか」としている。^v『古事記』の地の文では「麗美しき嬢子、その道衢に遇ひき」と「麗美しき嬢子がその道衢で（天皇に）逢った」と表現されている。しかし、うたの中では、「木幡の道に 遇はしし嬢子」と「木幡の道で（天皇である私が）お逢いした嬢子」と表現されている。これは、次の『古事記』下巻の記事も同じである。

又天皇、丸邇の佐都紀臣の女、袁杼比売を婚ひに春日に幸行でましし時、媛女道に逢ひき。……（記九九）

本論では、うたの表現としての「道に逢」うことを考察しているのので、地の文における「道に逢」うことは考察対象から外す。

^{vi}『新編全集』など

^{vii}なお、相聞以外の「笑」みも四例（③四七八、⑤八〇四、⑥九四一、⑰四〇一一、⑱四一六〇）あるが、本稿は相聞的発想における「笑」みについて考察するため、論考の対象からは外した。

^{viii}『全註釈』など

^{ix}青木生子「万葉の歌一首 我れと笑まして人に知らゆな」『和歌文学の世界 第六集』（笠間書院）昭和五十三年七月。なお、青木生子は、巻十八・四一一六、巻十八・四一三七、巻十六・三八一のようなたも「男同士の相聞歌」と位置付けるが、これは、宴において、主人へのあいさつ歌として親愛の情を示す「笑」みをよんだものであり、相聞歌における「笑」むを対象としているここでは対象から外す。

^x『新編全集』など

^{xi}巻九・一七三八歌脚注。

^{xii}影山尚之「聖武天皇の歌」『セミナー万葉の歌人と作品 第十一巻』（和泉書院）二〇〇五年五月

^{xiii}青木生子前掲書は、巻十八・四一一六、巻十八・四一三七、巻十六・三八一のようなたも「男同士の相聞歌」と位置付けるが、これは、宴において、主人へのあいさつ歌として親愛の情を示す「笑」みをよんだものであり、相聞歌における「笑み」ではないと考える。

^{xiv}影山尚之前掲書。

^{xv}『釈注』は、「雪見の遊びなどの宴」での「行きずりの恋に興味をそそぐ宴誦歌」を想定し、そのうたを「天皇がとぼけて、自分相手にうたってくれた」ものとして、「おうむ返しに返した」としているが、題詞の「思」や、「笑」むことの特徴、さらに「おうむ返し」をする

ことで表現する意味を考え合わせるとその想定は難しいと考える。

*本文は塙書房『CD-ROM 万葉集』に、『古事記』『日本書紀』『風土記』は『新編日本古典文学全集』（小学館）のそれらによった。但し、一部私に訓を付し、字を改めたところもある。

*注釈書の略称は以下の通り。

『代匠記・精』…契沖『万葉代匠記・精選本』、『童蒙抄』…荷田信名『万葉童蒙抄』、『考』…賀茂真淵『万葉考』、『玉の小琴』…本居宣長『万葉集玉の小琴』、『略解』…加藤千蔭『万葉集略解』、『古義』…鹿持雅澄『万葉集古義』、『新考』…井上通泰『万葉集新考』、『口訳』…折口信夫『口訳万葉集』、『全釈』…鴻巣盛広『万葉集全釈』、『総釈』…吉澤義則・石井庄司『万葉集総釈 第二』、『窪田評釈』…窪田空穂『万葉集評釈』、『私注』…土屋文明『万葉集私注』、『全註釈』…武田裕吉『増訂版万葉集全註釋』、『旧大系』…『日本古典文学大系 万葉集』、『注釈』…澤瀉久孝『万葉集注釈』、『旧全集』…『日本古典文学全集 万葉集』、『集成』…『新潮日本古典文学集成 万葉集』、『全注』…木下正俊『万葉集全注 四』、『新編全集』…『新編日本古典文学全集 万葉集』、『釈注』…伊藤博『万葉集釈注』、『新大系』…『新日本古典文学大系 万葉集』、『和歌大系』…『和歌文学大系 万葉集』、『全歌講義』…阿蘇瑞枝『万葉集全歌講義』、『全解』…多田一臣『万葉集全解』